にしても、ヒットラーの政權獲得にしても、ドイツ特にエルベ以東ドイツの農業組織及び農民階級の問題に盲目であつては、眞に理解されることは出來ないであらう。特にナチスの支配に於いて「土地」の問題に特殊な重要性が見出されそして「ユンケル」的土地所有がまた新しい意味を有ち始めた現代に於いては、ドイツの農業の歷史は再び檢討さるべき充分の理由を有つてはゐないであらうか。

こゝに原著の第二卷の流麗な邦語に移されたのを手にして、吾々は、原著第一卷卽ち古代末期より十八世紀末に至るドイツ農業史が吾々の言葉で表現される日の一日も近からんことを切望して已まないものである。（菊版四六四頁、東京、有斐閣發行、定價四・〇〇）〔中山〕

ホッブス（西哲叢書 VIII）　重松俊明著
ヒューム（同　XI）　土井虎賀壽著

昭和丙子二月、蒙昧主義滔天の濁流に理性の覆沒を免れその光明を喪失せざらんがため、田邊元教授監修のもとにその企劃を發表せる西哲叢書三十餘卷は、爾來二ヶ年餘にして內十七卷を旣刊し、略ゞ所期の目的を達成するに幾く、この國の知識人達に尠なからず寄與しつゝあるは、洵に讃ふべく亦歡ぶべき事實と云はねばならない。而して、此の叢書の裡に纂められた三十有餘の先哲は、夫々の時代に夫々の思想を代表しヨーロッパの歷史に於ける知性の發展を顯證するものであつて、此處に紹介するホッブス（1588—1679）ヒューム（1711—76）の二哲人が共にイギリス經驗論の代表者たる事は更めて冗說するまでもなからう。併し、イギリス經驗論を代表するものは何もこの二人に限つたわけのものではない。先驅者R・ベーコン、オッカムを別とするも、我々はF・ベーコン、ロック、バークレイの名を逸するわけにはいかない。だが、今該叢書がF・ベーコンを繼承するホッブスと、その究竟に於てロック、バークレイを徹底せんとするヒュームとを以て特にイギリス經驗論を代表せしめんとするも、限られた册子を考慮に入れるならば蓋し止むを得ない事であらう。

× × ×

一六四二年のクロムウエル革命、四九年のチャールス一世處刑に續く共和政の實施、六〇年の王政復古、八八年の名譽革命。イギリス近代國家成立のための變革と反動のこの狂瀾怒濤期こそ將にホッブス哲學の歷史的背景をなすものであつた。一方に於て王權擁護者と見做され身の危險を感じて巴里に亡命したホッブスは、他方に於ては「單からぬ無神論者」として王黨側の指彈を甘受するを餘儀なくされた。成立期の避くべからざる二重性の裡に而も名譽革命を識らずして逝つたホッブスは、「保守的な傳統的絕對主義と進步的な革命的な個人主義との、全く相對立する思想」をそのまゝ一つに結合してゐた。「こゝに彼の特異な思想の深刻さと獨創性とが認められると同時に、多くの無理と破綻とが包藏さ

れてゐることも否めない。」

重松氏の著書は、第一章生涯、第二章ホッブス哲學の方法、第三章論理學、第四章第一哲學、第五章人間論、第六章道德哲學、第六章政治哲學の各章よりなり、その觀察はあくまで客觀的正確さに立ち、「本叢書の意圖を汲んで、ホッブスの思想の全貌を能ふかぎり歪まざる姿に於て描き出さうと努め」られたものである。それだけに、我々は此處に著者の特に主體的な把握を期待するといふ事は出來ないかもしれない。しかし、本書がホッブスのモノグラフイーとしてこの國に初めて現はれたものである事情を眷るならば、その全思想體系をこの様に客觀的な形で示された著者の深き用意に却つて感謝しなければならないであらう。

× × ×

「ライプニツツにまで傳へられた大陸の炬火が海原を渡つてヒユームにまで傳達された様に、ヒユームによつて英國的色彩をうけた炬火は」再び海原を渡つてカントを源流とする獨逸哲學を喚び起した。名譽革命を經て一つの新らしい出發點と指導理念とを獲得したイギリスの近代資本主義がその發展の軌道を產業革命に進みゆく時代に思索の道を歩んだヒユームは、まことに「古き大陸と新らしき大陸とを結ぶ『島國』としての大英帝國を象徴する歴史的使命を果してゐるのである。」しかし、ヒユームは「單にカントやヘーゲルへの道を築く手段的存在でなく、彼にのみ基き彼のところにのみ止まる獨自の存在理由をもつ。」「あらゆる現在を征服しあらゆる未來に生命の資糧たる」べく、「全くヒユームと對立的な立場を守る著者をすら克服し、著者の眼界を擴大し、著者の生命を將來に向つて激發するもの、換言すればヒユームに於ける永遠性を目指して本書は、ヒユームが自ら „My Own Life“ に於て「印刷機から死產して轉げ落ちた」と稱する不幸な著述 „Treatise of Human Nature“ の解說的叙述を試みたものである。卽ち、第一部知性論は „Treatise“ の Book I: of the Understanding の、そして第二部感情論は Book II: of the Passions 及び Book III: Of Morals の夫々叙述に當てられてゐる。而も、之等はスピノザ、ニーチエ並びにゲシタルトと比論的に解說せられ著者の鋭い主觀を通して極めてデイナミツシユに浮彫りされてゐる。

四三頁以後の „Treatise“ の說明に先行して一七頁から四二頁までに於て、著者は先驅的思想家としてのロックとバークレイを語り更にヒユーム哲學の位づけを試みてゐられるが、特に三九頁より四二頁に至る僅々四頁に足りない文章は、ヒユームを一介の懷疑論者として哲學史の一隅に片付けようとする從來の俗論に挑戰する好文字として將に必讀に價する。（京都弘文堂書房發行定價各一・三〇）〔野末〕

Wilkinson, B; Studies in the Constitutional History of the thirteenth and fourteenth Centuries.

8°. p.p. 290. Manchester Univ. Press 1937.